ISSN 1345-3505

AGULI

Aoyama Gakuin University Library Information

青山学院大学図書館報

特集 こんな図書館がほしい Part2

No.72

http://www.agulin.aoyama.ac.jp/

Jan. 10, 2006

百人一首一夕話

目　次

巻頭エッセイ
私を導いてくれた２冊の書物と師…鈴木　豊　2
特集「こんな図書館がほしい Part2」……　4～11
新聞記事の探し方……　12
投書箱から……　14
展示資料紹介
百人一首一夕話……　15
図書館広報板……　16

特集「こんな図書館が欲しい Part2」
理想の図書館……北原　照久　4
せめて「普通」の
図書館をつくりましょう……野末俊比古　6
学生がつくる大学図書館……松川　実　8
世界の図書館ウェブサイトめぐり…戸堂　康之　9
ブックウォッチング……秋山　武清　10

■巻頭エッセイ

私を導いてくれた2冊の書物と師

会計専門職大学院
会計プロフェッション研究科長　鈴　木　　豊
SUZUKI Yutaka

私の大学院時代のゼミの恩師は不破貞春博士である。先生は我が国会計学会の始祖といわれた太田哲三博士の高弟である。私は、大学時代は公認会計士試験を目指しており実務家すなわち会計プロフェッションへの道を目指していたわけですが、最年少で公認会計士第2次試験に合格し、大学時代の後に日本公認会計士協会会長になられたゼミの宮坂保清先生より大学院の不破貞春先生を訪ねてみよといわれ、お話をお聞きしゼミ生となり、大学院での研究へと足を踏み入れたのです。大学院修士・博士課程の授業は、米・独の会計学書がテキストであったが、それら書物の理論的研究書の集大成が先生の昭和36年の初版で、数版を重ね、昭和39年の『**新訂会計理論の基礎**』(中央経済社)でありました。この書物は、総ページ458ページのアメリカ、ドイツ等を中心として当時会計研究書として、内外で著名であった書物を渉猟した、大著の当時においても又それは現代においても稀にみる深い洞察力に充ちた会計原論研究書であり「時価主義会計学」の理論的集大成の書物でした。当時は、名目貨幣資本維持を指向した取得原価主義会計が会計制度の基礎であり、不破博士が提唱した実質資本維持を指向する時価主義会計を、理論的にまた本質的議論として認めつつも制度としては受け入れられなかったのである。しかし時価主義の不破理論は、不破博士自身が昭和5年に東京商科大学（現在の一橋大学）を出られ、郷里の高岡高商教授から一時数年間実業界に入られ、大企業経営における経理実践を経験され、特にドイツ会計学の考え方に傾倒され、「会計は企業家の感覚に適合し、しかもなお社会的役立ちをも果たしうるように、両者の間に健全な調和が保たれなければならない」という考え方により、企業体理論、実質資本維持による費用補償の損益計算そして時価主義評価の会計理論をうち立てられたのである。同郷の元一橋大学教授の高名な会計学者の飯野利夫博士は、本書を評されて「我が国の会計学書として不滅の業績である」といわれている。熱心に勉強せよ、可能な限り内外書物を研究せよ、そして口ぐせの大学教職者は、一般の人よりもほんの少しモラルが高くなければならないと、高邁で易しくも厳しく叱咤激励されたのである。不破貞春先生そして奥様の元本学文学部教授の不破治子先生に妻が本学出身でもありご媒酌をして頂いた4年後に、残念ながら亡くなられ郷里高岡の名刹国宝瑞龍寺に眠られている。この数年で日本は会計ビックバンによりまさに不破理論の時価主義会計の時代になっており、数年に一度お墓参りに行かせて頂いているが先生と一度お話をしたいものだと思っている。本書と先生のお写真は、机の右上の棚の上にあり、

その理論的探求の方法論と先生のお考えを困った時には吟味させて頂いている。

大学院時代の早い時期、不破先生が監査論の研究をやりなさいとおっしゃられ、やはり我が国監査論の歴史上の大学者の一人であられた田島四郎博士にお会いした。監査論研究の院生は私しかいなかったため、３～４年間先生と一対一でアメリカ監査論の先駆者であったR.K.Mautzの原書を克明に読解することのお教えを頂いた。監査機能論を研究してゆく過程で、経営あるいは業績監査の体系化を試みる研究調査を続けていましたが、日本ではあまり進展しなかったのであるが、近年はまさにコーポレートガバナンス等の監査として開花し始めている。監査機能の拡張について、世界でこの領域が発展しているのがアメリカ、イギリスの国・地方自治体や公的機関に対する監査すなわち公監査領域であることを知ったのである。そしてこの後、20数年間にわたりアメリカ、イギリスの国民・市民の支払った税金や公金に対するパブリックアカウンタビリティに基づく公監査制度の研究に没頭することになり、これと同時に税理士資格も保有していたため、公会計の収入財源である税金及び税法のしくみの研究を行うこととなった。日本においては、国民や市民は税を強制徴収されているにも拘らず、政府・自治体・公的機関が果たすべきアカウンタビリティについて無関心であり、このことが現在の国・地方合わせて800兆円もの借金を生じさせてしまった大きな原因である。この公監査研究において出会った書物こそ、アメリカGAO（Government Accountability Office）の1972年の初版から現在の2003年の第５版にいたる*Government Auditing Standards*であった。現在は、195ページに及ぶ政府・地方自治体・パブリックセクターの監査・検査・評価・監察の基準とそのガイダンスであり、表紙が黄色の為「イエローブック」と呼ばれ、アメリカのみならず、世界各国の公監査基準設定のバイブルとなっており、国際的ディファクトスタンダードといってよい書物である。この基準は、国民及び納税者の立場から、税金や公金の使い方をモニタリングするための合法性・合規性、財務会計の基準の準拠性、政策・行政サービスの経済性・効率性・有効性の観点から深く、高度に検証するための基準である。我が国においてこの設定の気運がやっと起きつつあるがまだまだ相当の時間がかかりそうである。そしてこの書物こそ私の研究の第一段階から現在の第二段階へ進む原動力となった書物であり、これも常に私の机の上にあり考えに窮する時にひもとくのである。

かくして第一冊目の著者である不破先生、第二冊目である基準書の設定に深くかかわったGAOや関係機関の方々こそが私の師である。私は昭和60年にある縁から大木金次郎先生がおられた東京西ロータリークラブに会計教育という職業分類で入会した（その後出席困難となり退会）際のイニシエーションスピーチにおいて、「会計・監査・税務マインド」の違いを強調する話をさせて頂いたのだが、この40年間はまさに会計プロフェッションのマインドの研究であり、このことが多分、現在の会計専門職大学院での私の教育及び運営の基盤となっているのではないかと考えている。

（会計プロフェッション研究科教授 公監査論・法人税法）

特集 こんな図書館がほしい Part2

理想の図書館

北原照久
KITAHARA Terubisa

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。

書かれた文字だけが本ではない。
日の光(ひか)り、星の瞬き、鳥の声、
川の音だって、本なのだ。

ブナの林の静けさも、
ハナミズキの白い花々も、
おおきな孤独なケヤキの木も、本だ。

本でないものはない。
世界というのは開かれた本で、
その本は見えない言葉で書かれている。

(中略)

200億光年のなかの小さな星。
どんなことでもない。生きるとは、
考えることができるということだ。

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。

「世界は一冊の本」という長田(おさだ)弘さんの詩です。僕が好きな詩のひとつです。

僕にとって本というものは、無限の好奇心を抱かせてくれ、無限の興味を掻き立てられるものです。そして、無限の知りたい気持ちを与えてくれると同時に、それを満たしてくれるものでもあるのです。老若男女、誰でも一冊の本から様々なことを学ぶことができます。一冊の本がきっかけで、知識が広がったり深まったりもします。神様が人間に与えてくれた「知る喜び」を満たしてくれる必須アイテムとも言えるでしょう。ですから理想の図書館に求めるのは、「充分に豊富な蔵書」に尽きます。

近頃ではコンピューター管理されていますから、捜している本があるかないか、どのコーナーに並んでいるか、ボタンひとつで画面に表示してくれます。その一冊だけに留まらず、関連している本までリストアップして教えてもくれるでしょう。効率よく調べたいポイントへ直行するのには大変助かります。けれども、本との出会いはもう少し偶然の方がステキではないでしょうか。

書店が大好きで、時間があればちょっと立ち寄り、パッと買って読んでみるのが、忙しくて移動の多い僕の日常です。評判を聞いていた本を選ぶこともありますが、ふと目に止まった一冊に決めることもあります。古本屋も大好きです。印刷のインクのにおいが際立

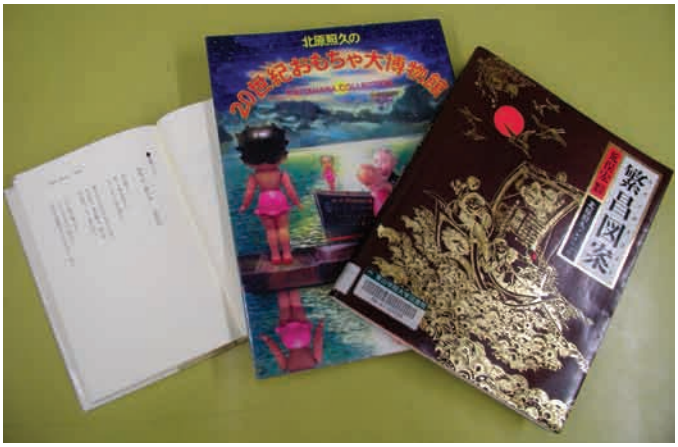
つ新刊と違って、年月を経た紙のにおいや質感は何とも言えません。背の高さもまちまちの本が、ひと昔前の装丁で隣り合っていたりして、何とも愛しいのです。一巻、二巻と順に発売になっていた本でもズラーッと揃って棚に並ぶ姿は見事です。どの本も次のご主人を待っているのかと思うと、つい長居してしまいます。

図書館の本は気軽に手に取ることができ、ビジュアル的にも美しく並んでいて欲しいのです。その中を利用者があれこれ手に取りながら、うろうろしているような一見無駄な動き。背表紙やタイトルに目が止まったり、これって何だろう、何のことだろうと感じるひとときが、本との出会いには大切だと思います。手に取れる環境、そこに本が存在していてくれなければ、一冊との出会いといううれしいハプニングは起こらないわけですから。本との出会いを広げるためにも、書庫に豊富にあるのではなく、利用する人たちのすぐそばに本があるというのが理想です。コレクターの立場から申し上げても、目に見える圧倒的ボリュームを誇れる図書館、外国映画に出てくるような、天井の高い部屋で、壁が上から下までぎっしりと本で埋まっている光景は憧れです。

これから先の理想の図書館にもうひとつ言わせていただくと、そこには僕の本を絶対に置いて欲しいです。僕のコレクションや想い、考えなどを全くご存知ない方々が、ふと手に取って見てくださるためにも、ぜひ置いてください。僕自身、偶然手にした一冊の本との出会いで背中を押され、一歩を踏み出せました。同様に僕の一冊が、どなたかの背中を押して応援できたなら、これ以上の幸せはありません。

とにかく、本に親しみましょうと呼びかけたいので、図書館はその空間、未知の一冊と出会える場を提供して欲しいです。

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。



（経済学部出身 ブリキのおもちゃ博物館館長）

せめて「普通」の図書館をつくりましょう

野末俊比古
NOZUE Toshihiko

およそ大学図書館と名乗るならば、最低限、満たすべき条件があると考えます。

第一に、**充分な質と量の資料を所蔵していること**が大前提です。ここでいう資料には、図書や雑誌などの印刷資料だけでなく、DVD などの視聴覚資料やデータベースなどの電子資料も含まれます。「質」の判断は難しい面もありますが、とりあえず「数」だけでも充実させねばなりません。教育・研究に優れた成果・実績を残している大学は、図書館の資料も充実しています。

第二に、**図書館には専門職が必要**です。教育（学習）・研究の態様は大学によって異なりますから、当然、図書館が所蔵すべき資料も同じではありません。国内の新刊図書だけで年間７万点以上が出版されている現在、世界中に無数に流通している資料のなかから、自らの大学にとって有用な資料を選択、収集することは、専門的な知識・技能を持った図書館員がいなくてはできません。また、レファレンスサービス（資料・情報に関する調査・相談）などの専門的な業務には、豊富な経験も要求されます。図書館先進国である米国では、修士の学位を持った図書館員が、教員身分で専門的業務を担当しています。非専門的業務の担当を除き、図書館情報学を学んでいない、図書館勤務の経験がない職員が採用、配属（異動）されることなど考えられません。

第三に、**図書館の資料は開架**（利用者が直接、手にとれるように並べること）**が大原則**です。利用者は、「レポートで指定された本の所在を OPAC（図書館所蔵資料のデータベース）で確かめて、その本だけを借り出していく」という使い方をするだけではありません。むしろ、書架を眺めて、資料をあれこれと手に取り、中身に目を通しながら吟味していくことのほうが一般的ではないでしょうか。これをブラウジングといいますが、ブラウジングが私たちに「情報との（思いがけず貴重な）出会い」をもたらすことは、誰もが経験していることでしょう。近年の情報利用行動の研究にも「出会い」の大切さ（開架の重要性）を裏づけるものが多く見られます。図書館が狭いために資料の収蔵スペースが不足する場合には、「集密書架」などを優先して検討すべきで、ブラウジングのできない閉架、とりわけ「自動書庫」は、最終的な手段ととらえるべきです。

第四に、図書館はできれば独立した建物であること、ひとつの建物に他の施設と同居する場合には１階を含むフロアに位置すること、最低でも**入口が１階にあること**が重要です（アプローチに階段・スロープがあってもよい）。図書館の利用者、とりわけ学生にとって、建物外から容易かつ気軽に入れることは、大きな意味を持ちます。私が訪れたことのある国内・海外（米国）の大学図書館のうち、入口が１階になかったのは、小規模単科大学の一例だけです。なお、同じ理由で、キャンパス内の最も便利な場所（中心）に建

物が位置しているのが理想であることも付言しておきます。

*　*　*

繰り返しますが、以上は「普通」の大学図書館として満たすべき条件です。図書館の専門家でなくても、常識的に考えれば頷けることばかりだと思います。以上の４点以外にも指摘すべき点はありますが、別の機会に譲り、「理想」の大学図書館について、米国の状況に言及するかたちで、少しだけ述べておきます。ここでは、主に「学生に対する学習支援」という役割を取りあげてみます。

グループでゼミ発表の準備をする場面を想定してください。図書・雑誌のほか、ビデオ・DVDやインターネットなど、多様なメディア（情報源）を用いて情報を集め、大きめのテーブルでノート・ペン・ハサミなどを使って、あるいはパソコンを使って、集めた情報を処理、加工し、プレゼン資料をつくっていく――この一連の作業を、分担あるいは共同しつつ、会話（議論）しながら進めていける環境が、米国の図書館では提供されています。長時間、滞在するので、館内飲食可としているところすらあります。（念のため付記すれば、会話・飲食禁止のフロアやスペースももちろんあります。タバコの分煙と同じで、利用の目的に応じたエリア分けがなされているのです。）

学習支援のための取り組みはほかにもいろいろ実施されています。米国では、図書館（学部学生用）は、情報通信技術も積極的に活用し、他施設と協働しつつ、「学習支援センター」や「学習資源センター」などと呼ばれる組織へと「進化」しています。単なる「資料の提供」に留らず、学習活動をトータルに支援することが使命であるとの認識が広がっているのです。

教員に向けては、さまざまな教育・研究支援が展開されています。わが国でも、学生・教職員らのあらゆる「知的活動」の「総合的な支援」を志向した図書館の普及が期待されています。

*　*　*

評判のよい図書館は、図書館界の経験や図書館情報学の知見はもちろん、ほぼ間違いなく利用者の声（ニーズ）を取り入れています。相模原キャンパスの図書館がつくられるときはどうだったのでしょうか。少なくとも私は、図書館情報学の研究者としても、利用者としても、意見をきちんとお伝えする機会はなかったように思います。

声を上げなかった私にも非があるかもしれませんので、今後、青山キャンパスに図書館が新たにつくられることがあるならば、図書館関係者（図書館員・研究者）と利用者（学生・教職員）が関わるかたちで進めていただきたいことを、この場を借りて強く訴えておきます。私の愛する青学において、この拙文のタイトルが皮肉になってしまうことのないよう、心から希望します。

（文学部助教授　図書館情報学）

—ドイツ・フライブルグ大学中央図書館—

学生がつくる大学図書館

松　川　　実
MATSUKAWA Minoru

フライブルグはドイツの西南部に位置し、黒い森の一角にある大学都市（人口約20万人）である。フライブルグ大学（正式名称:アルベルト・ルードヴィッヒス大学）は2007年には創立550年を迎えるヨーロッパでも由緒ある大学の一つである。フライブルグ大学中央図書館は1978年に現在の建物に移転拡充され、フライブルグ市のほぼ中央に位置し、誰でも利用ができる開放型図書館である。中央図書館の所蔵件数は350万を数え、2003年の年間利用総数は約37,500人（一般人約1万人を含む）であり、借り出された年間図書総数は約200万冊に及ぶ。さらに中央図書館には2つの大きな閲覧室があって、そこにも合計で約14万件の単行本と雑誌が開架で並べられ、約1,300人分の机が用意されている。

「ドイツの学生はよく勉強する」とは日本人が感じる最初の印象である。これは勉強しなければ卒業できないからであり、学部によっては入学者の3分の1が2年以内にドロップアウトしてしまうからであるという。そのようなドイツの学生の図書館の使い方は、①レポートやゼミ論文を執筆するための文献の渉猟と、②国家試験や単位試験の受験勉強の場である。ドイツのゼミ論文やレポートは日本の修論のミニ版に比肩し、完成までに数ヶ月掛かることもあり、1年間にレポートを数本抱える学生もいる。そのため、学生は中央図書館だけでなく、各学部の「ゼミナール」と称する学部図書館を駆け巡って文献を漁らなければならない。

国家試験や単位試験は筆記と口述試験から構成されることが多く、また受験回数に制限があるため、なかなか失敗が許されない。中央図書館にはカフェテリア、銀行、古書店、文房具店なども備えられ、さらに近くには学生食堂があるため、丸一日そこで勉強することができる。さらに大学施設の中では珍しく冷房を備えているために、特に夏休みは閲覧室の空席を見つけることが難しい。2階のメインフロアーにはクロークがあり、さらに中2階には多数のロッカーが用意されていて、学生は一定期間借りることができるため、重い辞書や六法全書をわざわざ自宅に持って帰る必要もない。カフェテリアや3階の談話スペースには、学生グループがあちこちで自主ゼミを開き、口述試験を念頭に想定問答のために白熱したディスカッションを耳にすることができる。

フライブルグ大学中央図書館

大学図書館が学生によってフルに活用されている例をドイツの大学で見ることができた。

（法学部教授 知的財産法）

世界の図書館ウェブサイトめぐり

戸　堂　康　之
TODO Yasuyuki

『AGULI』第71号でテュールスト先生も書かれていたが、私も最近めっきり図書館に行くことは少なくなった。研究・教育に必要な学術論文や統計データの多くがインターネットを通じてダウンロードできるようになったからだ。これらの論文･データのうち、有料のものは図書館のサイトを経由して入手することが多い。したがって、図書館のウェブサイト上でいかに多くの論文やデータが入手できるか、いかに早く目的の論文・データまでたどり着けるかは、私にとって非常な関心事である。

そのような観点から、筆者にゆかりのある世界のいくつかの図書館のウェブサイトを訪れ、本学のものとの比較を試みた。対象は、スタンフォード大学、南イリノイ大学カーボンデール校（アメリカ）、香港中文大学、首都大学東京の4校とした。また、比較の項目は以下の4点である。

(1) ダウンロード可能な電子ジャーナル（学術誌）のリストがあるか（これがあると必要な論文が素早く探し出せる）。
(2) 電子ジャーナルのデータベースとして経済学で代表的なJSTOR、ScienceDirect、EBSCOhostが利用可能か。
(3) ダウンロード可能な統計データベースのリストがあるか。
(4) 統計データベースとして国際経済学分野で有用な世界銀行のWorld Development Indicators（WDI）、OECDのSourceOECDがウェブ上で利用可能か。

2005年11月11日における調査の結果が右の表にまとめられている（○ = その項目をすべて満たしている、△ = 一部満たしている、× = 満たしていない）。世界のトップ校の1つであるスタンフォード大学や、近年国際的に評価の高まっている香港中文大学が全ての項目を満たしていることは当然であろう（例えばカライチダキスらによる世界の経済学部のランキングでは、スタンフォード大学8位、香港中文大学84位、東京大学138位であった）。首都大学東京や中レベルの州立大学である南イリノイ大学は統計データが整備されておらず、加えて首都大学は主要な電子ジャーナルのデータベースであるJSTORを持たない。

	(1)	(2)	(3)	(4)
青山学院	○	△	○	△
スタンフォード	○	○	○	○
南イリノイ	○	○	×	×
香港中文	○	○	○	○
首都大学東京	○	△	×	×

表：世界の大学図書館ウェブサイト比較

本学は、JSTORとWDIを持たないことから（2）と（4）が△となっているが、それ以外の項目は全て満たしており、ネット上の図書環境は世界的に見て比較的充実していると言える。本学図書館には今後も一層サービスを拡充して、世界トップレベルの環境を整えられることを希望するとともに、学生の皆さんには、ぜひこのような充実した環境があることを知り、積極的に活用していただきたいと願ってやまない。

（国際政治経済学部助教授　経済成長論）

ブックウォッチング

秋　山　武　清
AKIYAMA Takekiyo

「この間また同じ本を買ってしまったんですよ」（そんな馬鹿なことがあるものか）というのが当時の印象であったが、自分自身が同じようなことをするようになって、あの話は本当だったんだなと実感できるようになった。これは何十年も昔に海老池俊治先生から「英文学概論」を教えていただいたときに聞いたことなのですが、私の場合は読みたいと思う本を買ってしまうと安心してしまうせいか、積読書にしてしまうことが少なくないのだが、2度買い3度買いをしてしまうのは、どうもこの手の本が多いような気がする。

私は都内に住んでいたころは、大学の研究室を仕事場としていたのであまり問題はなかったが、片道2時間もかかる生まれ故郷の茨城に住むようになってからは、研究室と自宅に文献が分散してしまい、探し出すのに苦労することがある。そのようなときにもお世話になるのが大学図書館である。参考係のアドバイスやパソコンの情報によって抽出した文献を開架式の閲覧室で現物を探すのも、一種の冒険で、なかなか見つからなくていらいらすることもあるが、苦労して見つけたときの喜びはまた格別である。

あるとき“wait for”と“await”の用法の違いを調べるためにリストアップした文献を閲覧室で探していたのだが、疲れて横の棚をなんとなく見ていたときに、ふと目にとまった *Crabb's English Synonyms* という本を開いてみてびっくりした。求めていたぴったりの情報があるではないか。おそらくこの本を手にすることがなかったら、二つの語句の異同は解明できなかったかもしれない。データベースによる検索の完備した現代でもこのような偶然による運不運があるところが、面白いところかもしれない。

参考係に色々アドバイスしていただいても、残念ながら調べのつかないこともある。最近の若い人はあまり使わないようだが、私の田舎の方言に「ちくを抜く」「ちく抜き」という言葉があり、それぞれ「うそをつく」「うそつき」という意味なのだが、語源を聞くまでは、いやな言葉だなというある種の方言コンプレックスのようなものをこの言葉に対して抱いていた。ある人の話によると、その昔、麻生の殿様と鹿島の殿様の間で領地の境界のことで揉め事が起こり、竹の杭を打って境界線を定めたのだが、どちらかがその竹杭を抜いて自分に有利なように打ち直したことが「ちくを抜く」「ちく抜き」の由来だという。語源を聞いてからコンプレックスは解消した。そのことは『常陸風土記』に載っていると聞いたので図書館で調べてみたが、これはとうとう調べがつかなかった。どなたか心当たりの方はご教示いただけると幸いである。

標題のバードウォッチングならぬブックウォッチングは文字通り、本を眺めることであるが、実は、私の趣味の一つである。ちょっと時間があると街の本屋や学内の購買会へ

寄って本を眺めて歩くのである。本の装丁よりも何よりもまずタイトルである。気になるタイトルの本があると手にとって、目次を眺めてみる。論文などを書くための文献の場合は別だが、仕事と直接関係がなくて、買う場合にはまずタイトルを気に入ることがきっかけになる。まだいくらも本を書いたことはないが、書きたい本のタイトルだけは随分とメモってある。昨年、赤川次郎の『**イマジネーション**』という本を書店で発見したときにはがっかりしてしまった。いうまでもなく、それは私が書きたいと思っていた本のタイトルだったからである。

上記のように大学図書館にはずいぶんお世話になっているが、次にサンフランシスコ州立大学の図書館について若干書いてみる。一番印象に残っているのは、教職員であろうが、学生であろうが、返却期限を守らなかった場合には罰金をとられるということである。現金なもので期限を守らない人は非常に少ないという。また職務が細分化されているせいか、参考係に蔵書数を聞いてみたら全然埒が明かない。それは Mr. John Doe に聞いてくれという。ただ彼は2週間ほど休暇をとっているということだったので聞かず終いになってしまった。

サービス面でびっくりしたのは春学期と秋学期中は図書館内の自習室とコンピューター室が何と24時間オープンなのである。コンピューター室は常時2人の係も待機していた。渡米してまもなくその自習室のお世話になりそうになったことがあった。アパートに友人夫妻が遊びに来て夜の10時過ぎに帰ったのであるが、見送ってアパートに戻ってみるとドアがロックされてしまっているではないか。短パンにTシャツという軽装で鍵も財布も電話もすべて家の中である。4月のサンフランシスコは夜ともなると結構寒いことも多い。おまけに土曜日である。一瞬お先真っ暗で、呆然としてしまったが、このとき思い出したのが図書館の自習室である。覚悟を決めて自習室に向かったのであるが、図書館の近くまでいくとキャンパスポリスのパトカーが止まっていたので、お巡りさんに事情を話すと無線で管理会社に連絡を取ってくれて、30分ほどで来てくれるということで命拾いをしたものである。

図書館とは別組織ではあるが、ITトレーニングセンターがあり、ここは月曜日から金曜日まで、毎日午前10時から午後5時まであいており、ワードやエクセルの初級から始まって盛り沢山なメニューが用意されていた。予約は要らず、30人までの早い者勝ちであったが、教職員でも学生でも自分の受けたい講習を無料で受けることができる。何とうらやましいサービスではないか。

(2005. 9. 29)

(経営学部教授 ビジネスコミュニケーション論・商業英語論)

新聞記事の探し方

青山学院大学図書館には、新聞記事を探すのに大変便利なオンライン・データベースや CD-ROM があり、数多くの種類の新聞を所蔵しています。新聞はあらゆる分野の情報が詰まった宝の山です。データベースや索引類を使いこなして、学習、研究、また就職活動にも是非役立ててください。

国内の新聞

オンラインデータベース

朝日新聞 聞蔵(きくぞう) DNA for Libraries		学内ネットワーク環境のみ利用可(統合検索) 1984年以降の掲載記事のほか、AERA、週刊朝日の記事を全文収録。 オプションとして知恵蔵も収録している。 2006年4月から、人物データベース、戦後紙面データベースが追加される。
日経新聞 日経テレコン21		自宅からも利用可(統合検索) 日経4紙の横断検索、および企業検索、人事検索ができる。 日経新聞は1975年以降の全文検索が可能。
読売新聞 ヨミダス文書館		学内ネットワーク環境のみ利用可。 読売新聞1986年以降の記事全文、The Daily Yomiuriの1989年以降の全文を収録。 現代のキーパーソン約23,000人を収録した人物検索のオプションも付いている。

CD−ROM

(本館1階情報検索コーナーでご利用ください。)

朝日新聞 戦後 見出しデータベース	朝日新聞号外	読売新聞 CD-ROM (明治・大正・昭和)
1945年から1999年までの朝日新聞縮刷版の巻頭記事索引をデータベース化したもの。本文は収録していない。 (相模原分館でも利用可能)	明治12年(1879年)から1998年Wカップ杯までの号外のみを収録。レファレンスカウンターでお貸しします。	明治7年(1874年)から昭和20年(1945年)までの読売新聞全文のデータベース。本誌をそのまま画像データベースとしているので、図表、写真も見ることができる。

海外の新聞

オンラインデータベース

ProQuest Newspapers		自宅からも利用可(統合検索) ・International Herald Tribune (1992-) ・New York Times (1995-)・Sunday Times (1996-) ・Times of London (1992-)・USA TODAY (1987-) ・Wall Street Journal (1982-) 上記の新聞全文を収録。発行されて48時間の新しい記事も閲覧可能。
NNA (国際ニュース&データベース)		学内ネットワーク環境のみ利用可。 アジア、欧州各地の経済情報を中心としたニュースおよび1997年以降の記事データを日本語で提供している。世界の動きがリアルタイムで読める“EXPRESS”、各地の詳細情報や経済動向、過去の記事検索などが提供されている“POWERASIA”(アジア)、“POWEREU”(欧州)などのメニューや、アジア・欧州のビジネスニュースを毎日受信できるメールマガジン“NNA BUSINESS MAIL”も無料で利用できる。
The Times Digital Archive		自宅からも利用可(統合検索) 創刊から200年間の「ロンドン・タイムズ」全紙面を収録。完全フルテキストを検索・閲覧できる歴史アーカイブ。
LexisNexis at Lexis.com		本学図書館を通してID、パスワードを取得して利用。 世界最大級の法律情報検索データベースであり、世界の新聞も数多く収録している。

CD−ROM

(本館1階情報検索コーナーでご利用ください。)

New York Times on Disc

The New York Times

1981年からのものを収録。

本館で購読している新聞については、ホームページの本館をクリックすると「新聞資料一覧」がありますので、ご覧下さい。

冊子体資料

データベースでは検索できない年代の新聞には冊子体ツールを使いましょう。

【昭和以降】
朝日新聞記事総覧、毎日ニュース事典、読売ニュース総覧、昭和ニュース事典

【明治・大正時代】
明治ニュース事典、新聞集成明治編年史、大正ニュース事典、新聞集成大正編年史、新聞集成昭和編年史、外国新聞に見る日本

(本館運用課参考係　須藤玲子)

投書箱から

図書館の入り口をはいると、すぐ横のテーブルの上に投書箱が置いてあるのをご存知ですか。朝、はいっているかなと、ちょっと不安な気持ちで、のぞきます。ないと正直ほっとします。投書は、大体、いい事は少ないからです。「おっしゃることはよくわかります、まったくそのとおりです、こちらとしてもそうしたいのですが、すみません今後気をつけます。」ということになるものがほとんどです。もちろん、１件１件真摯に受け止めています。わざわざ紙に書くという行為には、それだけ強い思いがこめられていると思うからです。自分自身のことを考えてみても、苦情や意見を言いたくても、そのとき思うだけで、なかなか行動にはでません。まあいいかとすませてしまいます。ですから、いただいた投書の重さはひしひしと感じます。

ここ数年の投書のなかで、一番多いのが、開館日程と空調の問題です。開館日程につきましては、すべての要望に応えることは困難ですが、それでも毎年少しずつ改善してきました。夏休み中の土曜を開館し、日曜開館を試験期だけでなく授業期間中は実施し、入学試験期の閉館も減らし、というように、年間の開館日数はだいぶ増やしました。空調の問題は、夏には冷房がききすぎる、いや暑い、冬には暖房が暑い、いや寒いと、クレームがきます。暑さ寒さについては個人差もある上に、空調設備そのものの改善ができないので、設定温度を変えたり、スイッチを入れたり切ったりして対応しています。

すぐに改善しているものあります。どこそこが壊れている、机のがたつきがうるさい、申込票が記入しづらい、電卓用の席が欲しい、～を置いて欲しい、いろいろあります。

また、最近目に付くのが、利用者のマナーの悪さに対する苦情です。本の書き込みに始まって、私語が多い、飲食をしている、タバコの吸殻が図書館の正面に落ちている、壁に落書きが多いというのまであります。どれも大学生がすることとは思えません。注意書きのポスターを貼ったり、実際に注意をしたり、この夏休みには、壁の落書きを全部消しました。なんだか空しい気がします。それでもそれが現実なのですから、働きかけをしていかざるを得ません。きちんと図書館を利用している多くの方々に迷惑をかけてしまうことになるのは困ります。

図書館員の態度に対する苦情は、一番応えます。その反面嬉しい投書も時々あります。カウンターの対応が親切だ、感謝のことば、花が飾ってあって心が和むというものもありました。そんなときは、やったーと思います。

いいことではありませんが、気がつかないうちに、今の状態が当然と思ってしまうことがあります。視点を変えてみれば、改善策が出てくることもあります。これからも利用者の声には耳を傾け、少しでも使いやすい図書館を目指して、努力していきたいと思っています。

入り口の古い投書箱、何かあった時は、思い出してください。

（本館運用課閲覧係 山本千恵子）

展示資料紹介

—小倉百人一首の注釈書—

百人一首一夕話（ひゃくにんいっしゅひとよがたり）

浪華書肆：敦賀屋九兵衛、天保４年（1833）９冊、26cm

『**百人一首一夕話**』は江戸時代後期の学者、尾崎雅嘉（オザキマサヨシ）（1755～1827、大阪）が著した『小倉百人一首』の注釈書である。歌人一人一人にまつわる興味深いエピソードがふんだんに添えられていて雅趣あふれる読物となっている。まず『百人一首』の作者名を掲げ、その作者の和歌を記す。和歌の上欄には作者の略伝を掲げ、次に歌の評釈を示し、さらに各作者の逸話を詳細に語るという手法で書かれている。

歌人の伝記・逸話・事歴を広くいろいろな書物より参酌して穏健中正な叙述を試みており、読本風な体裁を内容に持たせ著されている。当時人気があったのは、平易な行文の中にこれらのことが解かれていることや、大石真虎（オオイシマトラ）（1792～1833、尾張国名古屋）の挿画が本文の理解を大いに助けているためで、著者自身もしばしば挿画中の本文で賞賛の辞を呈している。

筆者である尾崎雅嘉は幼少より書物を読むことを好み、諸家に就いて学んだ。漢学に詳しく好んで著述をなす一方、和歌にも堪能であった。さらに奥田尚斎に儒学を学び、若くして儒者として認められていたが、後に父の教えに従い国学者に転じた。雅嘉は大阪の難波に生まれ、終生大阪を愛し、度々の転宅を重ねながらも当地を離れることはなかった。当時の大阪は近世文運の最高潮時代で、漢学･詩学･国学のいずれも著名人が続出し、江戸の文化に対しても遜色がなかったばかりか、或いはそれ以上であったと記されている。著書としては『**群書一覧**』（千七百有余部の和書を三十数門に分類整理し、それぞれ内容を解題している）６巻６冊が博く知られているが、他にも多数残されている。

挿画を描いた大石真虎については幼少の頃より画に驚くほどの才能があり、15歳の時に張月樵を師とし、中年期には吉川一渓に仏画を学んだ。後に渡辺清（尾張復古大和絵派）の画風を愛し終身の師とした。医師の次男として生まれるが、常住を定めることがなく奇行も多く伝えられている。時代考証をつくした歴史画を描き、他にも書物の挿画を多く描いている。

百人一首の参考書目は多数あるが、中でも『**百人一首一夕話**』は異色あるものとして採り上げられ、また長く愛読されている。

展示：12月～２月、大学図書館本館

引用・参考文献

尾崎雅嘉著・古川久校訂
『百人一首一夕話』（上・下）岩波書店、1982年
菅 宗次・吉海直人編
『小倉百歌伝註 百人一首伝心録』和泉書院、1997年
日本古典文学大辞典編集委員会編
『日本古典文学大辞典』（６冊）
岩波書店、1983年～1985年

（本館運用課庶務係）

図書館広報板

本　館

1月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

3月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

通常開館　(1/10～2/4) 月～金 9：00～21：40
土　9：00～21：00

休業中の開館　(2/20～4/3)　9：00～19：00

休日開館　12：00～19：00

休 館 日

＊1/21・22は大学入試センター試験・2/27は第二部入学試験の為休館します。
＊休館中も紹介状の発行、文献複写依頼は受け付けます。（平日9：30～16：00）
＊4/4～通常開館

●試験期貸出・・・・・・1/8～1/27
（学部・短大生は貸出期間1週間、延長は全利用者1週間）
＊上記期間、卒業生・山手線コンソーシアムの方は、貸出できません

●春休み貸出・・・・・・1/28～3/28
（学部・短大生は貸出冊数10冊）
返却日　在校生・・・・・・・・・・・・・・ 4/11
卒業・修了予定者・・・・・ 2/28

万代記念図書館

1月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

3月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

通常開館　(1/10～2/3) 月～金　9：00～20：00

(土曜日)　(1/14, 21, 28)　土　9：00～17：00
(2/4)　土　9：00～16：00

休業中の開館　(2/6～4/10) 月～金　9：00～17：00
土　9：00～13：00

休日開館　10：00～17：00

休 館 日

＊4/11～通常開館

●試験期貸出・・・・・・1/9～1/27
（学部・短大生は貸出期間1週間、延長は全利用者1週間）
＊上記期間、卒業生は貸出できません

●春休み貸出・・・・・・1/28～3/28
（学部・短大生は貸出冊数10冊）
返却日　在校生・・・・・・・・・・・・・・ 4/11
卒業・修了予定者・・・・・ 2/28

編集後記

日進月歩で進化する図書館の利用方法。他方で、本を手に取る喜びという昔ながらの本の魅力も健在です（私も本のにおいが大好きです・・・）。特集「こんな図書館がほしい」の２回目、どうぞお楽しみ下さい。
（館報編集委員長　申惠丰）

青山学院スクール・モットー　地の塩、世の光　The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院大学図書館報“AGULI”第72号　2006年1月10日発行
編　集　青山学院大学図書館報編集委員会・大学図書館広報担当　TEL.03-3499-1402　FAX.03-3407-4472
発　行　青山学院大学図書館　〒150-8366　東京都渋谷区渋谷4-4-25　http://www.agulin.aoyama.ac.jp/